
現実と理想の仮面ライダー

神薙和刃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実と理想の仮面ライダー

【Nコード】

N7864D

【作者名】

神薙和刃

【あらすじ】

仮面ライダーは正義ですか？家族や友達の為に頑張る戦闘員たちは悪ですか？色々な意味で問題作。

第一話 ある日の戦闘後

「痛え…。」

俺は右腕に出来た傷を左の掌で押さえながら辺りを見回す。

そこは使われなくなった採石場で、無数の戦闘員の屍が散乱していた。

ベタにも程がある。

古今東西『悪の組織』とやらは採石場に集まって悪巧みをするのがジョーシキらしい。

そこでその悪の組織にはカウンターが付きモノだ。

それがこの俺『仮面ライダー』

有り体に言えば『正義の味方』

だがこの惨状はどうみても正義の味方とやらがする事ではない。

大体仮面ライダーのスタンスは『自分を無理矢理改造した組織への復讐』なのだから正義の味方らしさなんてこれっぽっちも無い。

最近の…クウガ？から段々ヒーローみたくなって来ているものの、あくまでフィクション。

大体俺にはそんなスタンスすら無い。ただ街の皆が『助けて』と言うからたまたま仮面ライダーである俺が戦う羽目になったと言うわけだ。

恨みます市民の皆様。

とりあえず帰る為に、俺は戦闘員の屍の中を歩く。

ホントはこんな光景見たくないが、アシであるバイクは戦闘員の屍を隔てた向こうに停車してある。乗るためには否が応にも屍を越えて行くしかない。

「うはっ」

知らず知らずの内に俺は戦闘員の左手を踏み付けていた。ぐにっとした感触が否が応にも戦闘員は元々人間だったと言う事実を思い出させる。

『兵隊は人を殺して金を貰う仕事』なんて言うが、なんのことはない。

『仮面ライダーも人を殺してなんとやら』な仕事だ。
金は貰って無いが感謝される。

ふと戦闘員の左手の薬指に何か光る物が填めてあるのに気付く。
良く見るとそれはマリッジリング。
結婚した男女がつける指輪である。
生涯共に歩む相手と自分を表すイニシャルのみが刻まれた指輪を見て、俺は頭を抱える。

「妻帯者ですか…」

よく有る。

妻帯者なり婚約者がいるなり、今日の戦闘には

「兄貴の仇いい！」

と叫びながら玉砕した戦闘員も居る始末。

やりきれません。

つまりは我々ヒーローは元々人間だった戦闘員のささやかな幸せを奪い、市民の皆様は戦闘員の遺族が哀しみに暮れる中仕事仲間と酒飲みあつて笑ったり家族団らんしたり

「好きです付き合ってください」とかやってたりしてる訳だ。

ピューっとな、吹いた風に巻き上げられた土煙が戦闘員たちに掛る。

戦闘員たちの白いプロテクターが僅かに茶色に染まる。

なんか神さまにも見捨てられたみたいで切ない。

せつないね戦闘員。

バイクに跨りアクセルをふかす。

採石場にドドドドと爆音が響き渡る。

振り替えれば月明かりに照らされる戦闘員たちの屍。

こいつら埋葬されんのか？

いつもなら帰る所だが、何か罪悪感を感じた俺は戦闘員たちを埋葬すべくバイクを降りた。

はたから見ればおかしい仮面ライダーである。

【続く】

第二話 怪人哀歌

この組織（シヨッカーに非ず）に入ってから数年になる。

俺は一介の戦闘員です。毎日毎日白いプロテクターつけて街の人を襲って仮面ライダーにぶっ飛ばされてます。

ただ運が良いのか今まで何とか生き残っております。

ここは組織基地の渡り廊下。

近くに休憩スペースが有り自販機もある中々環境がよろしい場所だ。

ただ問題点が一つ。

基地は地下に有るため日光が指さない。だから清々しさを感じる事が出来ない。

残念です。

「よう」

「あ、こんにちはです先輩」

先輩の戦闘員が話しかけて隣に座る。

何かソワソワしている。

アイスコーヒーを飲みながら俺はいぶかしげな視線を向ける。

すると先輩は何かはみかみながら告げた。

「俺、出世したよ。これから怪人になるんだ」

「あ……」

出世と聞けばおめでたいものだ。しかし組織内での出世は怪人へのステップアップ。

つまり『仮面ライダーに倒される』のが早くなったと言う事なの

だ。

俺が知ってるんだ。先輩が知らない訳が無いはずだ。けど先輩は身振り手振りを加えて嬉しさを延々説明する。その様子が何だか痛々しい。

「今日は俺の出世を祝い大いに酒盛したいと思う！嫌とは言わせねーぞ」

「あ…はい」

煮えきらない返事しかできません。死ぬ前提の、敬愛してた人を祝うなんて、まともな神経の持ち主が出来るかよ。

「終わったな」

今日も偶然生き延びています。

今日の前じゃ同僚だったやつらの上で先輩と仮面ライダーが殴り合っている。

仮面ライダーはヘルメットが滅茶苦茶ひびわれてるし、脇腹からはドクドク血を出してるのに、何かに憑かれたみたいに殴るのを止めない。

先輩も顔がボコボコになって膝がガクガクしてんのに殴るのを止めない。

まるで怪人と仮面ライダーはこうあるべきなんだって拳で主張してるみたいだ。

「ライダーキック！」

あ、先輩の延髄にライダーのハイキックが先輩の首めっちゃ曲がってる。

ドカーン、と

爆発と爆風が凄い。
目が開けられない。

「先輩、死んじゃったな」
「うん」

今回の作戦で生き残ったのは10人中俺を含め2人。

だがその同僚は左足がブチツとなっている。

だが痛みを感じないのは幸いか。

俺たちは捨て駒。恐怖無く相手に突っ込むために痛覚を除去されている。

「左足あった？」

「無い。作って貰えよ」
「そーする」

かなりサイケなやりとり。
普通の人間なら考えられないって。

同僚に肩を貸し、けんけんの要領でゆつくり進む同僚に付き添う俺。
変わらずに煌めく星空と月が何故か憎たらしい。

「そっぴやさ」
「うん？」

同僚が口を開く
星空を見上げていたせいか間抜けな返事になっちまった。

「先輩ってさ、彼女いたんだと。組織で売店やってたあのオネーサン」

「ハツミ」
「何か先月出来たらしいよ。そんでその後すぐに出世の通達が来たって」

「……」

つまり、今まで狙ってた相手をおとした矢先死亡フラグがおっ立ちまった訳だ。

そして我々はその彼女さんに先輩の戦死を伝えねばならんと。

先輩爆発して遺骨無し

彼女さんは空の骨壺を前にして泣けっか、神さま。

「せつねえな」
「せつない」

【続く】

第三話 果たしてどちらが悪役やら

「ライダーキイック！」

のどかじゃない昼下がり

町内の商店街で怪人が戦闘員引き連れて迷惑行為を働いております。どうやら活動資金なりを調達しに来たのかレジがその辺りに転がっている。

あらかた雑魚を片付けて俺はライダーの怪人と対峙する。

サソリをモチーフにしているヤツらしく、尻尾があり尻尾の先からあからさまに毒を持ってそうな緑色の液体が垂れている。

「いつも邪魔しやがって！」

「なら邪魔される様な事してんじゃねーよ！」

TVモノとは程遠いやりとり。

被害者は

「殺せ」だの無責任なヤジを飛ばしやがる。

こいつらだって元は人間なんだぞ。アンタらみたいな。

相手が尻尾で俺を刺そうとする。

俺はその尻尾を掴み相手を引き寄せる。

「ぬお！」

「ライダーキイック！」

バランスを崩した相手のこめかみに見事ハイキックが命中。

相手は首が折れた時鳴る様なむなくそ悪い音を鳴らした後爆発した。

「やったな仮面ライダー！」
「かっこいい！」

うるせエーよ畜生。

「仮面ライダーさん！生き残りが居ました！」
警官が一人の戦闘員を連れて来た。

何かたこ殴りにされたみたいでプロテクターがボロボロになっている。

多分市民にリンチされたんだろう。

「殺せ！」

「悪党なんか死んじまえ！」

「アイツやつつけてよ仮面ライダー！」

市民から広がる殺せコールに困惑する戦闘員。

視線を反らせばゴミ回収車に回収される戦闘員の残骸。

コイツラ

死ねばゴミですか。

《殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！》

「うるせえええ！」

俺はたまらず叫んだ。

市民は勿論、戦闘員もこっちを見てポカーンとしている。

「仮面ライダー……」

「行くぞ」

俺は戦闘員を肩に担ぎ、その場を後にする。

何か後ろで市民がザワザワしているけど知った事か。

「ほい、コーヒー」

「あ…どうも」

目立たない路地裏

自販機で買ったコーヒーを戦闘員に渡し、隣に腰かける。

仕事を終えたからだろうか、いつもより苦い味が喉を通過する。

「…なあ」

「何よ」

「なんで俺を助けた？俺はアンタら仮面ライダーの敵なのに」

「意味はねーよ」

ただ単に、戦闘員やら怪人が元々人間で、人並みの生活を送っているのを俺たち仮面ライダーが奪っていたとか

市民の奴らがそんなの考えた事無く『悪党はやられて当然』とかほざきやがっているのがたまらなく嫌になっただけだ。

「…なあ」

「今度は何よ」

「言いたかったんだけどさ、俺ら戦闘員とか怪人とかさ」

「うん」

「口ではああ言ってるけど、実はそんなに仮面ライダー恨んでないよ」

「え…」

予想外だ。

そんなの考えた事は無い。

「俺ら組織はさ、今の世間…事件に無関心な奴らやら腐った政治家が嫌だから世界征服を企んでんだよ。」

「うん」

「だけどそれには犠牲が出る。知らず知らずの内に俺たちの家族やら恋人やら…大事な人達が巻き込まれる事もある」

「そうだな」

「けどアンタら仮面ライダーはそれを未然に防いでる。俺たちの大事な人達を守ってくれている」

だから恨んでないのだと
戦闘員は俺の肩を叩いた。

神さまよお

何でこいつらが『善良な市民さま』より人間出来てんだ。
何でこいつらが俺たち仮面ライダーの敵なんだ。

「…あ、悪い。召集かったから、俺行くわ」

「ああ」

「コーヒーありがとな。後で恩返しするわ」

「要らねーよ」

そうして帰る戦闘員が去り際に一言

「これからアンタと戦う羽目にならないよう、神さまに祈るよ」

無理だつて

俺は仮面ライダーで、お前は組織の戦闘員。
必ず戦う運命にある。

運命なんてクソ喰らえなんて言っても、必ず戦う羽目になっちまう。

ああ

切ないねえ

俺は一気にコーヒーを飲み干した。

「せじねえー」

【続く】

第四話 理想を突き通すと言つこと

「であるからして、我々は仮面ライダーに最終決戦を挑むべく…」

びっしりと戦闘員で埋まる組織のホール。

ユウウツ。

仮面ライダーに助けられてからこつち、何かやる気無くしてしまつた。

そりや俺たち組織は腐つた世の中を打倒する為に闘う。

人に疎まれたつて構うもんか。

しかしあの仮面ライダーは俺を助け、どことなく俺たちを認めてくれる感じがする。

闘う気がしませんよ。

ええ

「…い。おい！」

隣のヤツに肩を叩かれ物思いから覚醒する。

「ん？」

「聞こえなかったか？お前『出世』だつてよ」

そう言われホールのプロジェクターに写されたシリアルナンバーに目をやる。

確かにあれは俺のシリアルだ。

やんややんやと物言う皆を尻目に、俺は自らが死ぬ確率が高くなつたと素直に喜べない。

と言つかあの人と闘いたくない。

組織の開発部門

その手術台に乘せられ、俺はぼーっと上の円形の照明を見つめていた。

脇では博士が改造に必要な道具やらを最終点検している。

お茶の水博士みたいなジーサンではない。

眼鏡のクールビューティーだ。

「博士」

俺は博士に話しかけた。

博士は何も言わず、こっちを向きもしない。

「俺ら、何で戦ってるんですかね」

「ん？」

「腐った世の中変えるつつつても、全然変わりやしない。汚職政治家は尽きないし、悪徳企業はまたおっ立つ。人は身勝手に犯罪犯すし周りの人間も見て見ぬフリ」

結局はいたちごっこだ。

誰かがつぶして誰かがまたやって…

それを延々と繰り返す。

無駄なのかな、と思ってしまう。

「止められないよ」

「え…？」

タバコを吹かす博士

俺は言葉を理解出来ず間抜けな声を上げてしまう。

「確かに意味は無いかもしれない。けどあたしらは理想の為に一杯人を食い潰してきたんだ。今止めるとあっちゃあ…」

「今までの犠牲が無駄になる…？」

無言で頷く博士。

「で、アンタはどんな怪人になりたいの？」

怪人になる戦闘員は自分の意志でモチーフを選ぶ事が出来る。

腐った世の中を変えと言つ理想。
理想を突き通す為の強い意志。

それらを持ち合わせたヤツを知っている。

俺は迷わずに答えた。

「仮面ライダーにしてください」

【続】

第五話 正義の味方とは

全国の仮面ライダーが来るべき組織への決戦に備え、続々と集結している。

その中にはもちろん俺もいた。

あの日、戦闘員を助けた時から俺の善悪は揺らぎつつある。

何が正しく、何が悪いのか判断出来ない
今まで闘ってきたのは本当に善行なのかすら疑わしい。

奴らが今までやってきた『改革』が一番世の中の為になるとすら考えている。

俺が必死こいて戦っても世界は変わらない。
欲張りな人間が人を傷つけて、傷つけられた人間が腹いせにまた別の人を傷つけて……。

そんな終わりの無い悪循環に嫌気が差してきた。

今は組織の本拠地前に居る。

リーダーの仮面ライダーからは非戦闘員は絶対殺すとか如何にも正義の味方らしい事を言っている。

ふと隣の仮面ライダーが願掛けをしているのが目に付いた。
手には少し錆びたロケットが目に付く

「あの…」

「どうした？…この事が？」

俺が頷くと、仮面ライダーはロケットをアーマーの奥にしまう。

「娘の写真だよ。今は離婚した妻のところにいるがね」

「娘さん、ですか」

「ああ。…思えば娘と嫁さん守るために仮面ライダーになったのに、仕事にかまけて離婚沙汰になっちまったからなあ」

皮肉なもんだ。とおどけてみせる相手に俺は曖昧な返事で返した。

「ただな、俺はそれでも戦うよ。娘と嫁さんがいる世界を」

「……」

「組織の怪人たちもさ、そんな幸せ背負って、戦って負けたんだ。だからここで止めたら立つ瀬が無いんだよな」

そうか。

戦うのは人々の為だけじゃない。

俺達との戦いで死んでいった怪人や戦闘員達の為でもあるんだ。

あいつらの幸せを奪ってしまったなら、俺達が、俺達を守る人々がその分幸せにならなきゃいけないんだ。

それが

『正義の味方』

「…てな訳で、もうちょっと気張ってみるか」
「ういっす！」

気分が晴れやかになった。
多少は吹っ切れた気がする。

確かに世界は変わらないかもしれない。
けれど俺の世界の見方は変わった。

怪人たち
戦闘員達。

すまない
俺はアンタらの仲間を倒す。
幸せを奪う。

でもその分守るべき人々を幸せにする。
俺自身も幸せになる。

だから。

「突撃！」

リーダーの号令で皆一斉に本拠地へ駆けてゆく。

決着をつけるために。

幸せを守るために。

【続】

第六話 交わらぬ道

組織の方も必死らしく、のっけからボスクラスの怪人たちをぶつけてくる。

その度に仲間の仮面ライダーが一人つつ残り、テレビの様な戦いを繰り返している。

振り返りはしない。

あくまで目標は組織の首領だから前へもっともつと前へ！

遮二無二に突っ込み、何をなぎ倒したかすら記憶に無い。

ただ無心のまま戦う。

もはや今までの

戦いの意義を見いだせず、惰性のまま仮面ライダーをしていた俺では無い。

やがて、俺達は信じられないものに出逢う。

俺達と同じフォーム

しかし鈍く輝く銀のアーマーと、鋭くつり上がったヘルメットの目の部分が違和感を抱かせる。

恐らく、コイツは敵。

俺が倒すべき

「先に往け。俺がコイツをやる」

目の前の仮面ライダーはすんなりと仲間を通す。
今部屋内には俺と、銀仮面ライダーだけだ。

「久しぶりだな」

銀仮面ライダーが口を開く。

なんとは無しに、確信は持てなかったけど予感はしていた。

「あの時コーヒーをおごつてやった奴か」

「ああ」

あの戦闘員は、立派な仮面ライダーになっていて
俺の立派な敵になっていた。

「仮面ライダーは俺の理想だった」

銀仮面ライダーは、静かに語る。

強靱な身体と確固たる意志を持ち、理想を貫く事のできるヒーロー
だと。

「俺は仮面ライダーになった。世界を征服し、世界を平和へ変える
と言っ意志を貫くために」

構える銀仮面ライダー。

「俺は仮面ライダーで在り続けた。お前たちの魔の手を退け、世界を守ると言う理想を突き通す為に」

俺もそれに応じる。

言葉はもう要らない。

二人同時に疾駆し、同時にハイキックを放つ。

ビュッ！つと空気を裂きXの形に交差する脚から衝撃波が放たれ、轟音が響き渡った。

刀の鏢競り合いの様に微動だに出来ず、ハイキックを放った姿勢のまま硬直する。

衝撃波によりひび割れた天井から落ちた欠片が地に落ち、カツン。と鳴った瞬間間合いを取り、再びお互いに疾駆する。

あとはひたすらパンチとキックの応酬。

通常の間人なら粉碎骨折や眼球破裂、内蔵破裂を引き起こしかねない程の威力を持つ凶器のぶつけ合い。

だが俺たちは屁でも無い。

戦う為に生まれた改造人間。

倒すべき敵。

強靱なヒーローである仮面ライダーなのだから。

この殴り合いの中で、俺たちは優越感や充実した感覚を覚えていた。別に俺達は人を傷つけて悦ぶサディストではないし、自傷癖のある

マゾヒストでもない。

こうやって闘う事により
拳により意志を伝達する。

相手の一撃で相手の意思を理解できる。

言語を超えた意思疎通。

お互い満身創痍と言う言葉が似合う状態だ。

アーマーはひびだらけだし膝は大爆笑している。

それでも引き下がれないからお互いに力無く取っ組み合いしたまま、
永遠とも錯覚する時間が流れている。

「負けられないんだよ…今までの犠牲に報いる為にも!」

「負けれねえんだよ…今まで倒してきたあいつらの為にも!」

お互いに放ったパンチがクロスカウンターとなりヘルメットに直撃する。

ああ、俺達は『Y』なんだ。
同じ道と一緒に進んでいたはずが、いつの間にか別れて別の道に
いたり。

違う道を歩んでいるように見えて、同じ目的に向かって歩いてい
ている。

相反して矛盾していない
その文字だ。

「おおおおっ！」

相手が渾身の力を込めて放ったライダーキック。
それにより俺の右腕を覆ったプロテクターは粉碎し、腕の骨も粉碎
骨折した。

だが、それにより隙だらけになった相手の右胸に左腕のパンチを

「うおらああああっ！」

叩き込む！

「ぐはあああっ！」

銀色の欠片を撒き散らしながら、銀仮面ライダーは壁に叩き付けら
れる。

「いいライダーキックだが、年期が足んねえよ」

ほくそ笑みながら相手に告げてやれば、相手は満身創痍の笑い声をあげ

「ちくしょー」

とだけ呟いた。

【続】

最終話 幸福論（前書き）

世界は変わる。

最終話 幸福論

あの戦いから一週間が過ぎた。

仮面ライダーになり、仮面ライダーと交戦した俺は、結局ライダーキックでもなんでもなかったただのパンチで轟沈した。

それから数時間後、組織の首領は討たれ組織は壊滅。幹部諸々は皆散り散りに逃げていったと言う。

俺はてっきり死後の世界で目覚めるのかと思いきや、そうじゃなかった。

戦いののち、生き残っていた怪人たちと共にドクターと仮面ライダー達に回収されていた。

幸い組織の非戦闘員達は先に保護されていたらしい。

怪人たちや俺達戦闘員は人間に戻れないから、限りなく人間に近い形へと改造手術を施された。

だからもう仮面ライダーへと変身出来ない。

組織も無い今、怪人だった奴らや俺達戦闘員は職探しに忙しい毎日だ。

だが組織の仕事よりはまあ、清々しい。

今でも思う。

仮面ライダー達の守る平和に意味はあるのかと。

否定する訳じゃないが、行程は出来ない。
今の世の中はダメだ。

犯罪者は病気を装えば簡単に無罪を勝ち取れる。
弁護士は被害者の前でガッツポーズをとるようなやつもいる。

冤罪をろくに調べやしないくせにやたらと威張る警察や、不正や横
領ばかりの政治家もいる。

セクハラ働く教育者や援交ばかりの女子、不良行為で関係ない人を
傷つけて開き直る少年たち

こんな平和
守る意味はあるのか？

あ、婆さんが困ってる
重い荷物抱えて横断歩道渡り辛そうにしているのに、誰も手を貸そ
うとしない。

しょうがないから俺が手を貸そうと近づいたら、学生らしき少年が婆さんの荷物を持ち、横断歩道を渡るのに付き添っている。

よく見れば、ゴミのポイ捨てを注意して拾っているオッサンや、道を開けてもらって

「ありがとう」と会釈する女子高生もいる。

ああ、なんだ

まだ大丈夫なんだな
世界は。

仮面ライダー
見てるか？

この世界はまだまだ大丈夫らしいな。

あんたたちが守るべき人々は、あんたたちの志を継いでいるよ。

あの戦いから一年後
組織は解体され、怪人たちは人間にとけこめるよう施術され、俺達
の戦いは幕を閉じた

かに見えた。

だが組織の残党がまた新たに別の組織を立ち上げ、世界征服の準備
を着々と進めている。

仮面ライダーになって、終わり無い戦いを覚悟してたけど、しんど
い。
諦めの良さが肝心だよ悪事に至っては。

休日は無し

手当ても無し

保険も退職金も無し

無い無い付くしの仮面ライダーだが、楽しみはある。

前に戦った、銀仮面ライダーもとい戦闘員。

奴から手紙がきた。

手紙には素顔の戦闘員とおぼしき男と、腕を組んでいる美人の写真。
なんか彼女みたいだな。

どうやら奴は無事職を見つけ、彼女も見つけられたらしい。
結婚も予定していると言う。

『仮面ライダー。俺はアンタが守る世界でいれて、幸せだよ』

その言葉で救われた気がした。

俺の理想は意味があつたのだと。

奪ってきただけの幸せを、守る世界に生きる誰かに与えられたのだと。

ハッピーエンドじゃないがバッドエンドでもない。

曖昧なトゥルーエンドに近い何か。

それが俺達仮面ライダーの結末。

悪くは無い。

月下に蠢く怪人。

今日もまた俺は仮面ライダーとして闘う。

かつて人としてあつた幸せを奪い、それ以上の幸せを人に与えるために。

「ライダーキイイックッ！」

いつもより

技の名が誇らしく響いた。

現実と理想の仮面ライダー

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7864d/>

現実と理想の仮面ライダー

2010年10月10日11時20分発行